

# ダニエル書 - 第12番

## 暗闇

Jeff Pippenger

2023-12-07

靈感を受けた言葉の中で二度繰り返されている語または句は、第二の天使のメッセージの象徴である。

王ネブカドネザルの治世の第二年に、ネブカドネザルは夢を見た。そのため彼の心は騒ぎ、眠りが彼から去った。そこで王は、呪術師、占星術師、魔術師、カルデヤ人を呼ぶよう命じ、王の夢を示させようとした。彼らは来て王の前に立った。王は彼らに言った、「わたしは夢を見た。その夢を知ろうとして、わたしの心は騒いだ。」ダニエル書 2:1-3。

夜の「暗闇」の中で、ネブカドネザルは像の夢を見たが、その夢を思い出すことができなかった。夜の夢の中で彼は像を見たが、その像の夢は、彼がその夢を見た夜と同じほど、彼の理解には暗かった。

そのときカルデヤ人は王にアラム語で言った、「王よ、永遠に生きよ。どうかその夢をしもべにお告げください。そうすれば、解き明かしをお示しします。」王はカルデヤ人に答えて言った、「そのことは私にはもう思い出せない。もしお前たちが夢とその解き明かしを私に知らせないなら、お前たちは八つ裂きにされ、お前たちの家は汚物の捨て場にされる。しかし、もし夢とその解き明かしを示すなら、贈り物と報酬と大いなる栄誉を私から受けるであろう。ゆえに、夢とその解き明かしを示せ。」  
ダニエル書 2:4-7

ネブカドネザルの像の夢の試験は、闇に包まれた像について正しい預言的説明を、夢の内容の解釈とともに提供できる者を識別するために設計された試験であった。ミラー派の歴史において、真夜中の叫びのメッセージと結び合わされた第二の天使のメッセージは、カルメル山での対決におけるエリヤによって型示されていた。それもまた、真の神が誰であるかだけでなく、真の預言者が誰であるかをも明らかにする試験であった。ホワイト姉妹が直接エリヤにより型示されたと述べているウィリアム・ミラーは、カルメル山におけるエリヤを代表した。しかし、そこで代表されていたのはウィリアム・ミラーその人というよりも、彼が導かれて理解するに至った預言解釈の規則であった。カルメル山では、男神バアルの預言者たちと女神アシュタロテの預言者たちが偽預言者であることが示された。ミラー派の歴史においても、カルメル山により型示されたように、プロテスタント諸教会が偽預言者であることが示された。

プロテスタント諸教会がウィリアム・ミラーの預言解釈の規則を拒絶したことを表明したとき、彼らはローマの娘となった。預言的には、娘は母の像である。ミラー派の歴史においてプロテスタントが不合格となった試験は、獣の像（娘）を識別し、生み出した試験であった。そこにおいて、真のプロテスタント主義の角が、背教的プロテスタント主義の角に対抗して顕れた。ネブカドネザル王は解釈を求めており、そのことによって、

彼は摂理的に、偽りの預言者と真の預言者の双方の顕現を生み出す働きに参与していた。

彼らは再び答えて言った。「王よ、その夢をしもべどもにお告げください。そうすれば、その解き明かしをお示しいたします。」王は答えて言った。「おまえたちが時をかせごうとしているのは、確かにわかっている。わたしがそのことを忘れてしまったのを知っているからだ。だが、もし夢をわたしに知らせないなら、おまえたちへの判決はただ一つだ。おまえたちは時が変わるまで、わたしの前で偽りと曲がった言葉を述べる用意をしているのだ。だから夢を語れ。そうすれば、おまえたちがその解き明かしを示せると、わたしは知る。」ダニエル書 2:7-9。

試練の期間の終わりに、カルメル山で、そして1844年10月22日に示されたその区別は、ダニエル書第2章にもまた例証されている。カルメル山、ミラー運動の歴史、そしてネブカドネザル王の像の夢という三つの預言的表象においては、エリヤ、ミラー、ダニエルに代表される正しい預言解釈に重点が置かれている。夢の解釈は、二つの種類の預言者が現れる歴史において封印が解かれるメッセージである。

カルデヤ人たちは王の前で答えて言った。「地上には、王の求めることを示すことのできる者は一人もおりません。ゆえに、どの王も貴族も支配者も、どの魔術師や占星術師やカルデヤ人にも、そのようなことを求めたことはありません。王のご要求はまれなことであり、それを王の前で示すことができるのは、人間と共に住まわれない神々のほかにありません。」このため王は怒り、非常に激昂して、バビロンの知者たちをことごとく殺すよう命じた。ダニエル 2:10-12

カルメル山で、エリヤは試練を提案したが、その試練は真の神が誰であるかだけでなく、真の預言者が誰であるかも明らかにするためのものだった。ダニエル書2章では、真と偽を見分ける試金石を示したのはカルデヤ人である。彼らは、ネブカドネツァルが求めている夢の解き明かしは人間にはできず、神にしかできないと説明する。また、彼らは「王が求めておられることはまれなことだ」と述べることで、ネブカドネツァルと彼の宗教的な知者たちとの関係が正しくない関係であると不平を述べた。彼らは、国家を代表する王が、彼らが権威者と見なされてきた宗教の領域に立ち入らないことを望んでいる。彼らは政教一致の原理そのものに抗議しているのではなく、国家を代表するネブカドネツァルが宗教界を支配下に置こうとして要求していることに抗議しているのである。宗教指導者が国家を支配するのであれば、彼らは政教関係でも構わないのだ。獣の像の試練は、私たちが永遠の運命を決する場であり、ネブカドネツァルの像の夢と同様、生死を分ける試練である。

そして、賢者たちを殺すべしとの勅命が出され、ダニエルとその仲間たちも殺すために捜し求められた。そのときダニエルは、バビロンの賢者たちを殺しに出ていた王の護衛隊長アリオクに、思慮と知恵をもって答えて言った。彼は王の隊長アリオクに言った、「なぜ王の勅命はこれほど急なのですか。」するとアリオクは事の次第をダニエルに知らせた。ダニエル書 2:13-15。

ダニエルが、まだ知られていない像の夢をめぐる生死に関わる状況を理解するよう啓示を受けたとき、彼は、三段階の試験過程の第二の、目に見える試験の歴史の中に自分たちがいるという事実を悟る十四万四千人を表している。しかしダニエルは、正しい食事を

取ることを選び、その結果第一の試験に合格した人々を単に表しているだけではなく、神が聖書の預言について特別な洞察を与えた人間の代表者も表している。

この四人の若者たちには、神があらゆる学問と知恵において知識と技能をお与えになった。また、ダニエルには、すべての幻と夢を悟る力が与えられた。ダニエル書 1:17。

忠実なヘブライ人四人は皆、食事に関する試験を通過したが、ダニエルは異象と夢の使者として選ばれた。ダニエルは、エリヤ、バプテスマのヨハネ、黙示録のヨハネ、ウィリアム・ミラー、そしてフューチャー・フォー・アメリカに代表される預言的使者を表している。預言的使者は、預言の試練と切り離されることは決してない。

キリストの時代には、ヨハネの証しを拒んだ者は、イエスによって恩恵にあずかることができなかった。ミラー派の歴史においては、（ウィリアム・ミラーによって代表される）第一のメッセージを退けた者は、第二のメッセージによって益を受けることができなかった。両方の歴史において、忠実な者たちは、その試練の過程がどこへ導いているのかを認識していなかった。弟子たちは、それが起こるとはっきり告げられていたにもかかわらず、十字架を見ようとしなかった。ミラー派は大失望を予見できなかった。ダニエルは、ネブカドネザルの像の夢に関連する生死に関わる状況をアリオクから知らされたとき、その夢の内容が何であるかも、像の試練がどこへ向かっているのかも知らなかった。彼が知っていたのは、それが生死に関わる事態だということだけだった。それゆえ、ダニエルはその解き明かしを理解するための時間を必要とした。

そこでダニエルは中に入って、王に猶予を与えてくださるようお願い出て、王にその解き明かしを示すと告げた。ダニエル書 2章16節

ダニエルは、最初の試みで自分が食べると決めた食事（方法論）において信仰を示した。ゆえに、キリストの時代の弟子たちと同様に、彼にも時間が与えられた。弟子たちに与えられた時間とは、キリストの死、埋葬、復活、そして弟子たちとエマオへの道で出会い、その後二階の部屋で再び会う前に行われた最初の昇天までの期間であった。そしてその期間の終わりに、キリストは彼らに聖霊を吹きかけた。

こう言うてから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」ヨハネによる福音書 20章22節

エゼキエルは預言した。すると、死んだ骨が一つに集められた。それからエゼキエルがもう一度預言すると、新しく形作られた体に聖霊が吹きかけられ、彼らは力強い軍勢として立ち上がった。キリストは弟子たちに息を吹きかけ、彼らの悟りを開いた。

そこで、彼は彼らの心を開き、聖書を悟らせた。ルカ 24:25。

すべての預言者は世の終わりについて語っており、ダニエルも例外ではない。彼が求めた時間とは、啓示を受けるために与えられた期間であった。ミラー派の待機の時期は、最初の失望から、マタイ25章とハバクク2章の預言に関連する遅れの時に自分たちがいることを彼らが認識するに至るまでの間であった。ミラー派史における遅れの時の経験は、第二の天使のメッセージの時に成就した。ダニエル書2章はその同じ歴史を表しているので、彼が時間を求めたことは、預言的にミラー派の遅れの時と一致している。したがって、ダ

ニエルが時間を求めたこととミラー派の遅れの時は、十四万四千人の遅れの時を表しており、それは2020年7月18日に始まった。

ネブカドネザルの像の夢を理解するために時間を求めたダニエルの願いは、黙示録第十一章において、二人の証人が通りに死体となって横たわる三日半として表されている。黙示録第十一章の三日半、すなわち預言的な荒野を象徴するその三日半の歴史の中には、叫ぶ声がある。干からびた骨を呼び覚まし命を与えるために慰め主が用いる人間の声は、夢が何であり何を意味していたのかの預言的啓示を与えられたダニエルによって表されている。荒野で叫ぶその声は、ダニエルに示されているように、夢と幻に関する預言的理解を与えられている。その声が叫んでいるという事実は、彼が「真夜中の叫び」のメッセージを与えられていることを示しており、その叫びは真夜中、すなわち暗闇を象徴する時に発せられる。

真夜中の最も深い暗闇の中で、声（ダニエル）は、暗闇に包まれたメッセージの理解を与えられた。声（エゼキエル）に与えられた命令は、死んだ干からびた骨に預言することである。彼がそれを行うと、慰め主が通りの死者に吹き込まれ、彼らは「生き返る」。しかし、そのよみがえりは祈りによってのみ成し遂げられる。通りで殺され、干からびた骨となった者たちがよみがえる歴史において、祈りは道しるべである。ダニエルは、その道しるべが示されるべきまさに適切な箇所、その道しるべを預言的に表している。

私たちの間に真の敬虔の復興が起こることこそ、私たちのあらゆる必要の中で最大にして最も緊急のものである。これを求めることを第一の務めとすべきである。主の祝福を得るためには熱心な努力が必要である。これは、神が私たちにその祝福を授けようとしておられないからではなく、私たちがそれを受け備えができていないからである。天の父なる神は、地上の親がその子どもに良いものを与えるよりもなおいっそう、神に求める者にご自分の聖霊をお与えになろうとしておられる。しかし、告白とへりくだりと悔い改め、そして切なる祈りによって、神が私たちにその祝福を授けると約束しておられる条件を満たすことは、私たちの務めである。

復興は、祈りへの応答としてのみ期待できる。人々が神の聖霊にこれほど乏しい間は、神の御言葉の説教の価値を理解することができない。しかし、聖霊の力が彼らの心に触れるとき、語られる説教はむなしく終わることはない。神の御言葉の教えに導かれ、その聖霊の現れのうちに、健全な思慮を働かせつつ、私たちの集会に出席する人々は尊い経験を心得、家に帰るときには、健全な影響を及ぼす備えができています。

古き旗手たちは、祈りのうちに神と格闘するとは何か、また御霊の注ぎにあずかる喜びがいかなるものかを知っていた。だが彼らは今、行動の舞台から退きつつある。では、その後を継ぐのはだれか。次の世代はどうだろうか。彼らは神に立ち返っているだろうか。私たちは天の聖所で進められている御業に目覚めているだろうか。それとも、私たちが奮い立つ前に、教会に何か強く迫る力が臨むのを待っているのだろうか。教会全体がリバイバルするのを見ることを望んでいるのだろうか。その時は決して来ない。

教会には回心していない人々がいて、熱心で力ある祈りに心を合わせて加わろうとしない者もいる。私たちは一人ひとりがこの働きに取りかからなければならない。私たちはもっと祈り、話すことを少なくしなければならない。不義がはびこっており、人々は、霊と力のない敬虔の形だけに満足してはならないことを教えられなければならない。

い。もし私たちが、自分の心を探り、罪を捨て、悪しき傾向を正すことに熱心であるなら、私たちの魂は虚栄に高ぶることはない。私たちは自分自身を信頼しなくなり、私たちの力は神から来るのだということを常に意識するようになる。

『セレクトッド・メッセージズ』第1巻、121、122。

ダニエルが選び取った食事に対する信仰を土台として、彼は、その食事が象徴していた方法論を用いることを要求する、目に見える試練の過程へと導かれた。すなわち、まず自分の神がその夢を突き止めて解き明かすと約束し、その後、その夢を王に提示することを成し遂げることが求められたのである。彼は正しい食事、すなわち正しい方法論を持っており、そして絶対的な「暗闇」にあったネブカドネザルの像の夢のメッセージを提示することによって、自らの信仰を目に見える形で示さなければならなかった。彼の次の行動こそが信仰の目に見える現れであり、というのも、彼は暗闇の中に置かれたときに神の民が用いる神の原則を実践したからである。

祈りを怠る者を、悪しき者の闇が取り囲む。敵がささやく誘惑が彼らを罪へと誘い込み、そしてそれはみな、祈りという神の定めの中に神が彼らに与えておられる特権を用いないからである。祈りは、全能の限りない資源が蓄えられている天の宝庫を開く、信仰の手に握られた鍵であるのに、なぜ神の子らは祈ることをためらうのか。絶え間ない祈りと怠りない見張りがなければ、私たちは不注意になり、正しい道からそれる危険にさらされる。敵は、私たちが切なる嘆願と信仰によって誘惑に抵抗するための恵みと力を得ないよう、あわれみの座へ至る道を絶えずふさごうとする。『キリストへの道』94頁。

ネブカドネザルが夜に見た夢の内容の暗さのため、ダニエルは三人の仲間と身を寄せ合って祈った。

それからダニエルは自分の家に帰り、仲間のハナニヤ、ミシャエル、アザリヤに事の次第を告げた。彼らがこの奥義について天の神のあわれみを願い求め、ダニエルとその仲間がバビロンのほかの知者たちとともに滅ぼされることのないようにするためであった。するとその奥義が夜の幻のうちにダニエルに明かされた。そこでダニエルは天の神をほめたたえた。ダニエルは答えて言った。「神の御名が世々限りなくほむべきかな。知恵と力は神のものであり、神は時と季節を変え、王を廃し、王を立て、知者に知恵を与え、悟りある者に知識を与え、深く隠された事柄を明らかにし、暗闇にあるものを知り、光は神とともにある。私の先祖の神よ、あなたに感謝し、あなたを賛美します。あなたは私に知恵と力を与え、私たちがあなたに願い求めたことを今私に知らせてくださいました。というのは、あなたは王の事柄を今私たちに明らかにしてくださいましたからです。」ダニエル書 2:17-23。

そのときダニエルは、「暗やみの中に何があるかを知っておられる方」から報いを受けた。日曜立法を求める運動は暗やみの中で進められており、神の糧を食していると公言してきた者たちは、教皇権の印を強制するための宗教的・政治的基盤を整える「獣の像」の形成を認識することを求められている。

ダニエル書2章は、ミラーライト運動の歴史における第二の天使の歴史を単に明らかにしているのではなく、むしろより直接的に、第三の天使の運動における第二の天使の歴史を示している。ネブカドネザルの像の夢をめぐる試練において、獣の像の試練が表されて

いる。神の民が、迫り来る日曜法という生死に関わる状況に目を覚ましていく預言的段階が、ダニエル書と黙示録において非常に具体的に示されている。

ダニエルは、像の夢に関する生死に関わるメッセージが発せられる歴史における使者を表している。彼は、理解するに至った食事の原則に立ち、信仰によって神がその幻を明らかにしてくださると述べるが、時間を求める。その時間こそが遅れの時である。その遅れの時の終わりに、彼はネブカドネザルの暗い夢の中に何があったのかを知らされるが、それだけではない。彼は、獣の像とそれに伴う試練を象徴するこの像の夢の理解を受けるだけでなく、遅れの時の終わりに神を賛美してこう言う。「神は知者に知恵を与え、悟る者に知識を与え、深く秘められた事柄を明らかにされる。神は暗闇の中に何があるかをご存じであり、光は神とともに宿る。」

ダニエルはここで、自らの賛美を「知識の増加」が起こったという文脈に置いている。というのも、彼は第十二章で、「賢い者たち」が「知識の増加」を理解することを明らかにし、さらに神が「賢い者たち」に「知恵」と「知識」をお与えになったことについて神を賛美しているからである。彼は直接「賢いおとめたち」に言及し、自分の時代を「遅延の時期」と結びつけている。彼は第二章に見いだされるその象徴を、第三の天使の運動におけるマタイ二十五章の「遅延の時期」の完全な成就の中に、直接位置づけている。さらに重要なのは、黙示録が、猶予期間の終わりの直前に、ダニエル書と黙示録の預言のことばを封じてはならないとヨハネに告げられたことを示しているという事実である。というのも、それらは同一の書だからである。

そして彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封印してはならない。時が近いからである。不義を行う者はなお不義を行わせ、汚れた者はなお汚れたままでおらせ、義なる者はなお義を行わせ、聖なる者はなお聖くあらせよ。」ヨハネの黙示録 22:10、11

ダニエル書と黙示録の預言の封印が解かれる時は、十人の乙女のたとえにおける遅れの時であり、その時はダニエルが猶予を求めたことによって表されている。彼の猶予の願いに続いて祈りがあり、それは干からびた骨の復活に先立って行われなければならない。知識の増大と、暗闇に包まれていた夢の像の意味が明らかにされた時期に、神はダニエルのためにさらに別のこともなされた。「彼は深く隠された事柄を明らかにされる。」真夜中の叫びの歴史における秘密の事柄とは、恩寵期間が閉じる直前に封印が解かれる黙示録の預言である。その「深く隠された」事柄とは「真理」である。

真理は、ダニエルに代表される使者に開かれる預言の鍵となり、それによって「七つの雷」の秘められた歴史を認識できるようにする。秘められた歴史とは、三つの道標の歴史である。第一は失望であり、最後も失望であることは、ミラー派の歴史に示されている。「真理」と訳されるヘブライ語の語は、ヘブライ文字の第一、十三、そして最後の文字を組み合わせて「不思議な言語学者」によって作られた。イエスは初めであり終わりであり、また「真理」である。「不思議な言語学者」によって作られたその語の構造は、「七つの雷」の秘められた歴史である三つの預言的な道標を示している。「七つの雷」は、ダニエルが「時」を求めて祈りに赴くまで封じられることになっていた。

2020年7月18日の失望は最初の道標であり、それは三つの道標の最後、すなわち日曜法に伴う失望を示している。中央の文字、つまり十三番目の文字は反逆の象徴であり、また七

つの雷の隠された歴史における中間の道標の象徴でもある。その反逆は、真夜中の叫びにおける愚かな乙女たちによって表される。というのも、真夜中の叫びは、2020年7月18日、真夜中の叫び、そしてまもなく来る日曜法という三段階の歴史における中間の道標だからである。真夜中になるやいなや、時は第十三時に入り、そこで、愚かな乙女たちが自分たちに黄金の油がないことを悟ることによって、彼女たちの目に見える現れが示される。

黙示録第十一章の「三日半」の象徴的な「荒野」において、神の民は「七倍」の呪いという象徴的な歴史の中にあるものとして表されている。その期間の終わりに、彼らは自分たちが散らされ、罪を犯し、父祖たちも罪を犯し、自分たちが神に逆らって歩み、神も彼らに逆らって歩んでこられたことを認めることになる。その認識は、彼らをレビ記二十六章の祈りをささげることへと導く。レビ記二十六章の祈りをささげなければならないというその認識は、預言的にはダニエル書第二章のダニエルの祈りと一致し、また第九章のダニエルの祈りによって例証されている。ダニエルが第九章でレビ記二十六章の祈りをささげた理由は、神の民の捕囚についてのエレミヤの預言の七十年の終わりに至っていると彼が認識したことに基づいていた。

その同じ七十年は、神の民の封印の歴史を表している。その七十年は、マラキ書3章の清めと、キリストによる二度の神殿清めを表している。それらは、獣の像の試練の歴史を表している。その歴史は2001年9月11日に始まり、間もなく来る日曜法で終わる。その象徴的な七十年の終わりに、ダニエルは祈ることができるように「遅延の時」を求める。彼の祈りは、預言の最後の奥義が彼に啓示されたときに聞き入れられた。その啓示は、神の真のプロテスタントの民が2020年7月18日以後もなお「荒野」の散らしの時にあった間に与えられた。その時、「真理」は「荒野で叫ぶ声」に啓示された。

次の記事でダニエル書第2章を続けます。

そして、主の怒りはこの地に対して燃え上がり、この書に書かれているすべての呪いをこれに臨ませた。主は怒りと憤りと激しい憤激によって、彼らをその土地から根こそぎにし、彼らを別の地に追いやった。今日、このとおりである。秘められたことは、私たちの神、主のものである。しかし、明らかにされた事柄は、永遠に私たちと私たちの子らのものであり、私たちがこの律法のすべての言葉を行うためである。申命記 29:27-29